

## ウィリアム・グリフィスの韓国近代史認識

著者	宮崎 善信
雑誌名	長崎外大論叢
号	18
ページ	221-242
発行年	2014-12-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1165/00000073/">http://id.nii.ac.jp/1165/00000073/</a>



## 【翻 訳】

## ウィリアム・グリフィスの韓国近代史認識

宮崎 善信

윌리엄 그리피스의 한국 근대사 인식

MIYAZAKI Yoshinobu

キーワード：「韓国近代史」、「隠遁の国、韓国」、「プロテスタント」

## はじめに

本稿の1から6は、金壽泰の「윌리엄 그리피스의 한국 근대사 인식」(ウィリアム・グリフィスの韓国近代史認識)を訳出したものである。

ウィリアム・グリフィス(William E. Griffis: 1843~1928年)はアメリカ人牧師で、1870年(明治3年)、ギドー・フルベッキ宣教師の依頼を受けて来日し、福井藩で教師を務めた。その後、東京大学の前身である東京開成学校でも教鞭をとったが、米国へ帰国後、日本人の思想、文化、歴史など広い分野にわたって研究し、著作や講演を通じて日本を紹介した。代表作『皇国』(1887年)をはじめ日本関係の著作が多く、ほかに『フルベッキ伝』、『ヘボン伝』、『S.R.ブラウン伝』など来日アメリカ人宣教師の伝記がある(以上、『日本キリスト教歴史大事典』より)。

このように日本通ともいえるグリフィスには、日本の隣国の朝鮮について『隠遁の国、韓国(原題: Hermit Nation, Korea)』(1882年)と題する著作がある。今回、翻訳・紹介する論文「ウィリアム・グリフィスの韓国近代史認識」は、この『隠遁の国、韓国』に表れたグリフィスの韓国近代史に対する認識を扱ったものである。執筆者は金壽泰教授(韓国国立忠南大学校文科大学教授)で、韓国古代史を専攻している。金教授は、グリフィスの韓国古代史に対する認識の特徴などを根拠に、韓国学界における同書に対する批判—日本による朝鮮植民地化を肯定するもの—は、単純化されているのではないかと問題提起を行っている。

以下は、金教授の論文に付された要約文を訳したものである。

この論文では、ウィリアム・グリフィス(William E. Griffis: 1843~1928年)の韓国近代史認識について考察する。グリフィスは著書『隠遁の国、韓国 Hermit Nation, Korea』(1882年)の著者として韓国で広く知られている人物である。米国人として最初に韓国史を著述した専門家でもある。したがって、その韓国史に関する著述は、韓国に対する米国人のイメージを形成するうえで大きく寄与した。

それゆえグリフィスに対する韓国学界の関心は相当なものだといえる。ところが、グリフィスの韓国史に対する認識は、一部を除けば極めて否定的に評価されている。『隠遁の国、韓国』が提示して

<sup>1</sup> 原題「윌리엄 그리피스의 한국 근대사 인식」(金壽泰)は、『震檀学報』110号(震檀学会、2010年12月)に収録されている。以下のページ末のローマ数字表示の脚注は、翻訳者(宮崎)による訳注である。ところで、同論文で参考にされているのは、グリフィス、申福龍訳、『은자의 나라 한국(隠者の国、韓国)』(集文堂、1999年)であるが、これはグリフィス原著の第8版を翻訳したものである(同翻訳書、p.13~14にグリフィスの第8版序文が掲載されている)。

いる核心論旨は、19世紀末に始まった日本による韓半島侵略を歴史的、必然的に帰結させるものとなっているからである。すなわち、グリフィスの韓国史叙述を日本の韓国侵略論を代弁するにすぎないと理解しているのである。

ところが、グリフィスの叙述に対する韓国学界のこうした理解には少なからぬ誤解があるのではないかと考える。グリフィスの韓国古代史研究を仔細に考察すると、そうした解釈は事実とは異なる。グリフィスは、近代以前の歴史において韓国は日本に多くのものを与えたが、最近にいたるまで韓国が日本から得たものはほとんどないと見ていたのである。

誤解があるのは、グリフィスの韓国近代史認識についても同じではないかと考える。日本による韓国強占について、多くはグリフィスが賛成したと理解している。だが、グリフィスが1920年代に入り、韓半島の独立を熱烈に支持していた人物として知られていたことをどのように理解するべきであろうか。したがって、グリフィスの韓国近代史認識を単純に日本による韓国侵略を代弁するものにとらえるのは難しいのではないかといえるだろう。

## 1. 問題の提起

最近、あらためて外国人による見聞録や叙述の翻訳が活発化している。すでに集文堂から旧韓末期の外国人による見聞録が叢書で刊行されているが<sup>ii</sup>、新たに韓国文学翻訳研究院が『かれらが見た我々の叢書』<sup>iii</sup>として取り組んでいる。これらの資料を通じて、当時の韓国の姿を具体的に考察することができるという理由から刊行されていると考えられる。しかし、その水準は依然として翻訳のレベルを超えられないようだ。訳者後記などでの解題程度の簡単な紹介にとどまっており、個別の研究者についての精度ある研究がなされていないのが実状である。

本稿で扱う歴史家ウィリアム・グリフィス(1843~1928年)の場合は若干異なる。グリフィスは著書『隠遁の国、韓国』(1882年)によって韓国で広く知られている人物で、米国人として最初に韓国史を叙述した専門家である。特にグリフィスは韓米修好通商条約の締結後、米国を初めて訪問した朝鮮の政治家をはじめ、1920年代の後半まで米国で活動した李承晩(イ・スンマン)や徐載弼(ソ・ジェピル)、そしてアペンゼラー<sup>iv</sup>やハルバート<sup>v</sup>といった米国人として韓国に留まった宣教師と非常に密接な関係を維持しながら韓国史を研究した。そのため、グリフィスの韓国史関連叙述は、韓国に対す

<sup>ii</sup> <韓末外国人記録シリーズ>：一部を挙げると次の通り。

H. ハルバート、申福龍(シン・ボンニョン)訳、『大韓帝国滅亡史』、集文堂、1999年。

F. マッケンジー、申福龍訳、『大韓帝国の悲劇』、集文堂、1999年。

W. グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、集文堂、1999年。

C. ケンダル、申福龍訳、『韓国独立運動の真相』、集文堂、1999年。

A. サベジランダー、申福龍、チャン・ウヨン訳、『朝鮮、静かなる朝の国』、集文堂、1999年。

<sup>iii</sup> <かれらが見た我々シリーズ>：一部を挙げると次の通り。

M. ブラント、キム・ジョンズ訳、『激動の東アジアを歩く：ドイツ外交官の目に映った19世紀の朝鮮、中国、日本』、山林出版社、2008年。

H. ウィグハム、イ・ヨンオク訳、『英国人記者が見た近代満州と大韓帝国』、山林出版社、2009年。

J. ロース、ホン・ギョンスク訳、『ロースの韓国史：西洋語で記録された最初の韓国歴史』、山林出版社、2010年。

E. ゴードン、シン・ジョンボム訳、『道の象徴：英国女性の見た東洋と西洋の信仰』、山林出版社、2013年。

<sup>iv</sup> アペンゼラー(Henry Appenzeller)：アメリカ人メソジスト宣教師(1858~1902年)。1885年、朝鮮に入国し、朝鮮最初の近代式中等教育機関である培材学堂を設立した。聖書の翻訳やその普及を通じて朝鮮の開化に貢献した。

<sup>v</sup> ハルバート(Homer Hulbert)：アメリカ人メソジスト宣教師(1863~1949年)。1886年、朝鮮に入国し、育英公院で英語を教授したほか、高宗(朝鮮王朝第26代国王)から厚い信認を得てアメリカをはじめ西欧諸国との外交の窓口の役割を果たした。抗日運動の支援も行った。

る米国人のイメージを形成するのに大きく寄与したと考えられる。こうしたことからグリフィスに対する韓国学界の関心はかなりのものだったといえるだろう。

グリフィスの韓国史に対する認識は、一部を除けば非常に否定的な評価を受けている。『隠遁の国、韓国』が提示している核心の論旨が、19世紀末に始まった日本による韓半島侵略を歴史的に、そして必然的に帰結したものとなっているからである<sup>2</sup>。すなわち、グリフィスの韓国史叙述を日本の韓国侵略論を代弁するにすぎないと理解しているのである<sup>3</sup>。ところが、グリフィスの叙述に対する韓国学界のこうした理解には少なからぬ誤解があるのではないかと考える。日本が韓国を支配しなければならない根拠として、古代からの韓半島諸国家が真の独立国ではなく日本に朝貢してきた属国であったという歴史的根拠を提示したと理解するのはその一例である<sup>4</sup>。ところが、グリフィスの韓国古代史研究を仔細に考察すると、そうした解釈は事実とは異なることがわかる<sup>5</sup>。特にグリフィスは、近代以前の歴史において韓国は日本に多くのものを与えたが、最近にいたるまで韓国が日本から得たものはほとんどないと見ているからである<sup>6</sup>。日本が韓国から大きな利益を得たという点をむしろ強調しているからである。それに加えてグリフィスは、日本が韓国の近代化を助けなければならないという見解をもっているからである。

日本の韓国強占<sup>VI</sup>に対するグリフィスの立場についても然りである。グリフィスが日本の韓国強占に賛成していたと多くの者が理解している。しかし、これは1920年代に入ってグリフィスが韓半島の独立を熱烈に支持した人物であると知られていたという事実とは異なる。この際、この点をどのように把握するのかという問題が伴う。それで、グリフィスは変化する環境に適応しようとする機会主義者に過ぎないと理解することもできる<sup>7</sup>。しかし、グリフィスの韓国近代史認識をそのように単純化するには難しい側面があるように思われる。ある人物を日本による朝鮮保護国化に賛成か、もしくは反対かで区分するとき、その基準は絶対的ではなく、その差も大きくはないという事実も考慮する必要がある<sup>8</sup>。そして、米国における代表的な日本史研究者であったグリフィスが、当初から日帝の韓国侵略を支持していたのかについてもより綿密な検討が必要である。それは、グリフィスの韓国史認識も時期的に変化した可能性が充分にあるからである。したがって、グリフィスの韓国史叙述はより慎重に検討する必要があるといえる。

この論考ではグリフィスの韓国観を考察するためのひとつの先行段階として、その韓国近代史認識をプロテスタントと関連する内容を中心に検討する。実際、グリフィスの主な経歴にはプロテスタント宣教師としての活動が含まれているからである。現在、グリフィスの歴史観とキリスト教との関係については簡単な指摘がなされている<sup>9</sup>。19世紀後半、海外布教と異文化を一般人に紹介した人物の中で最も成功した例であるという点から、グリフィスをキリスト教的膨張主義者ととらえている。つまり、グリフィスの歴史解釈には、19世紀後半、米国社会を風靡していた膨張主義的時代思潮のキリスト教的な一断面を見ることができるのである。

この点についても、当時の米国人宣教師の活動に対しては相反した解釈があると指摘せざるをえない<sup>10</sup>。なぜならば宣教師の帝国主義的性格を明らかにするという観点から、彼らが入国して活動した過程を詳細に追跡すればするほど、彼らから帝国主義者という典型を発見するよりも、どの時期、ど

<sup>VI</sup> 韓国強占：韓国に対する強制占領、つまり日本による朝鮮統治のこと。

の場所においても見られるような実存的な人間に出会うからである。米国の帝国主義的膨張に便乗して来たという面では宣教師たちも明らかに帝国主義的だったといえるが、彼らが宗教的な確信に基づいて善意の動機をもって到来し、朝鮮人のために献身的に働いたという事実も認めざるをえないのである。したがって、キリスト教、特にプロテスタントと関連してグリフィスの韓国史近代認識を具体的に考察する必要がある。

一方、グリフィスの多くの叙述は、グリフィスが卒業した米国ニュージャージー州のラトガース大学図書館によく整理されている。しかし、量があまりにも膨大なため、グリフィス関連資料全体を一瞥するに多くの困難がともなう。韓国関連資料に限ってみても同様である<sup>11</sup>。よって、本稿では、まず韓国ですでに翻訳されたグリフィスの『隠遁の国、韓国』と『アベンゼラー』を通じて問題にアプローチしようとする。このほか、解題の形で紹介されているいくつかの叙述も必要に応じて参考にする。こうした作業を通じて、グリフィスの韓国関連資料に対する精密な分析が本格化するための新たな契機になれば幸いである。

## 2. 韓国での宣教希望

グリフィスが韓国史に対して関心をもつようになったのはなぜだろうか。まずは、グリフィスが果たして日本による朝鮮侵略を支持するために韓国史を叙述したのかにつき確認する必要がある。これは、グリフィスが『隠遁の国、韓国』初版（1882年）の序文で記している‘なぜ日本は韓国の門戸を開放できないのだろうかという問い’と関連づけて考えることができる<sup>12</sup>。しかし、これは韓国と日本の関係を仔細に把握できない状況でおのずから浮かび上がってくる疑問だと理解するのが妥当であろう。

このことは、グリフィスが、米国が韓国と外交関係を樹立しようとしていたとき、日本ではなく中国を通じて実現しようとした点について説明している内容からも考察することができる<sup>13</sup>。米国政府はその当時まで、朝鮮に入るには日本の好意を通じてのみ可能であるかのように考えていた。ところが、いくつかの情報を通じて、中国が朝鮮の鎖国政策を撤回させるために有効な外交活動の拠点になると考えるようになり、それまでの認識を転換させた。これは朝鮮の門戸開放に関し、当時の日本の立場や役割を正確に示しているといえることができる。それゆえグリフィスが投じた素朴な問いをそのまま日本による韓国侵略を支持するものと結びつけるのは困難だといえるだろう。

何よりも『隠遁の国、韓国』初版に掲載された献辞に注目する必要がある。

科学、真理、純粋宗教を通じて自身と同族を開明させ、国から迷信、頑固さ、専制、土着的・異質的教権を追放し、祖国の団結、独立、名誉を維持するために努力する韓国のあらゆる愛国者に対し、その歴史と現実を描いた拙著を献げる。

グリフィスは韓国の独立のために努力する韓国のすべての愛国者たちに自分の書を献呈しているのである。これは初版の最終章「条約締結」の最後の部分にも同様の趣旨を載せていることから確認できる<sup>14</sup>。日本および米国との条約締結を通じて隠遁の国を脱した朝鮮は東アジア国際関係の中で多くの困難や危険に直面するだろうが、朝鮮の国家的尊厳は維持できるだろうという楽観的な立場を表明している。つまり、グリフィスは日本による朝鮮侵略よりも韓国の独立を望んでいたのである。し

たがって、グリフィスが韓国史叙述に関心をもった動機は、別の角度から把握する必要があるのである。

『隠遁の国、韓国』初版の序文と『アペンゼラー』はこうした事情をよく伝えている。初版でグリフィスは、1871年に日本の福井に住んでいたとき、日本海に面した敦賀と三国で数日間過ごしたことがあったという<sup>15</sup>。グリフィスは同地で韓国と日本の文化交流や相互関係について知るようになり、そして日本が隣国である朝鮮の後光を拝していることを何度も発見したというのである。これについてグリフィスは、日本はかつて隠者の国であったが門戸を開放して世界の交易地となったのになぜ韓国は秘境のような神秘の国となったのかとしばしば思いを巡らせ、韓国はいつの日か目覚めることになるのだろうかと問いかけた。

グリフィスは米国に帰国し、それまでに収集した資料をもとに一般読者のために中国や日本研究の大家も試みたことのなかった韓国史の叙述に着手したという。グリフィスは、将来、自分よりも有能な学者が現れて、韓国が世界に門戸を開放したら韓国にどれほどの影響があるのかを明らかにすることを望んだ。つまりグリフィスは朝鮮の門戸開放問題に深い関心をもって韓国史叙述に着手したのである。

グリフィスが朝鮮の門戸開放に関心を寄せた根本的な理由は、プロテスタント宣教に深い関心をもっていただからである。『アペンゼラー』はそのことを詳しく伝えている。序言の一行目にグリフィスは、1871年3月2日の朝、韓国のために祈り始めたという事実を明らかにしている<sup>16</sup>。外国人として教育の開拓者であったグリフィスは、当初日本の内陸部に住んでいたが、3月1日、海を隔てて朝鮮と向かい合う敦賀に滞在していた。翌日、福井に向かう途中、韓国を攻撃した神宮皇后を祀る神社を通り過ぎるときに朝鮮のために祈ったというのである。グリフィスは、海を越えた先に存在する朝鮮が一日も早く福音の祝福を受けられるようにと祈った。それ以来、日本とヨーロッパの資料を通じて韓国について研究し、1874年に米国に帰国した後、隠遁の国韓国に対して毎日祈るだけでは満足できず、文章を書いたり講演までも行うようになったという。

こうしたグリフィスの努力は韓米修好通商条約が締結される時期まで続いた<sup>17</sup>。グリフィスは1874年から1882年にかけて米議会に書簡を送り、米国が韓国の門戸開放に関心をもつように働きかけた。その際、韓国関連情報や統計資料も合わせて提供した。その後、グリフィスは『インディペンデント』や『サンデイマガジン』などの定期刊物や『アプルトン年鑑』に朝鮮に関する文章を数年にわたって掲載したという。グリフィスはたびたび編集者から朝鮮関係に紙面を使い過ぎないようにとの警告を受けていた。また、1881年、1882年、1885年には朝鮮関係本を続けて出版した。グリフィスは、祈りだけではなく著述を通じて米国による朝鮮の門戸開放、そしてキリスト教の導入を望んでいたのである。よって、そのためにはまず朝鮮が米国人との貿易や居住を認めるようにすることが必要だった。これを契機として教師や宣教師が朝鮮に入国できる道が開かれるからである<sup>18</sup>。

こうした事実は『隠遁の国、韓国』序文の最後の箇所でも確認できる<sup>19</sup>。グリフィスは、門戸開放後、キリスト教はそれがカトリックであろうと、ギリシア正教であろうと、プロテスタントであろうと歓迎されなければならないと述べている。そして、宣教師は韓国人に対して総力をあげてキリスト教を説かなければならないと力説している。グリフィスの韓国史に対する関心はプロテスタントの宣教と関連していたことがうかがえる。つまり、隠遁の国である韓国が門戸を開放しキリスト教国になることを望んでいた<sup>20</sup>。米国政府が朝鮮に関心を寄せ外交関係を締結させるために、韓国がどのよう

な国なのかを著述を通じて精力的に言及したのである。

### 3. オリエンタリズムの克服努力

グリフィスは韓国史を著述するにあたってどのような観点から臨んだのであろうか。グリフィスが文明と野蛮という等式のもとに韓国を把握しようとしたとする意見がある<sup>21</sup>。19世紀以降、米国ではほとんどの学者が東洋を永久的に劣等な文明体とする基準や構造を適用してきたが、グリフィスの研究がこれをよく示しているという。グリフィスが東洋文明を野蛮の象徴ととらえ、西欧文明を唯一の希望と理解し、極東の西欧化、さらには米国化しようと努めたというのである。

グリフィスは韓国史関連の著述を通じて広範囲にわたって資料を収集した。地図、図表、硬貨、陶磁器、言語、芸術、目撃者の記録や証言、鉛筆で描いたスケッチ、絵、写真、日本と中国の正史、航海史、外交官・宣教師・難破船員の証言、批判的な学者の知見など、韓国内外から集めた資料から情報を得ようとしたのである<sup>22</sup>。そして、それらの資料を用いて韓国近代史を著述する際に、グリフィスは編集者と旅行者の観点について言及している<sup>23</sup>。旅行者は自分が旅行した当時の状況だけを見勝ちだというのである。

ところが、編集者がもし部分的に自分の典籍を扱うことができ、文献の鑑定において初心者レベルを少し上回るならば、グリフィスは一般読者に対して少しは価値のある便覧を提供できると考えた。それで、グリフィスは近代生活に関する著述のために思慮深い目撃者たちの記録だけを事実として認めた。韓国の社会生活に関する西欧人の意見や判断は味付けをほどこすくらいにしか取り入れなかった。つまり、韓国近代史に関連し、誤りを提供する可能性もあるが、できるだけ事実に忠実であろうとしたと述べている。

グリフィスはまた、多くの宣教師がその著書の序文や導入部で韓国民族について多くの誤った情報を伝えてきたと指摘し、グリフィス自身の著述を始めると書いている<sup>24</sup>。韓国人が外国人に対して残酷で憎しみを抱いているという悪評は正しくなく、またそういう感情は韓国民族の真の民族性でもないというのである<sup>25</sup>。したがって、韓国という国や民族に対して語る際、“異邦の民族”という用語を使わなかったという<sup>26</sup>。これは、ある時期、宣教対象地域だったヨーロッパで生じたことばで、当時においても軽蔑の意味がこめられていた用語だという。なぜならばグリフィスにとっては民族も国も同じだったからである。よって、海辺から眺めるだけではその国の姿を判断してはならないように、港で研究しただけで、あるいはゆっくりと街歩きをする観光客の立場からその民族を判断してはならないと言及している<sup>27</sup>。

したがって、グリフィスは“東洋的”、“アジア的”という敬虔さの衣をまとった陳腐な用語や、ちょうど彼我とでは人間の本性に違いがあるかのように感じられる用語は使わないという。自分たちの祖先が半野蛮的な状態から進歩してきたという歴史学者やキリスト者には、東洋や西洋という概念が別途存在しないのである。科学者の目や想像力を備えた歴史学者なら、今の中国、韓国、日本で見られることは百年前の植民地期の米国、また五百年前のヨーロッパでも見られるからである。ただ、中国、韓国、日本ではそれが遅れて現れたにすぎないと考えた。よって、母なる大陸アジアの良い点は保存されるべきであって廃棄されてはならないという。要するに、人間の本性はどこでも同じだということである。グリフィスはそれぞれの民族は何よりもまず人間であると把握していた。そして、人間は良心において世界市民でなければならないと強調した<sup>28</sup>。

グリフィスは、韓国民族が外国人の目に映った現在の姿がそうでなくても、自分の国を誇りに思うだけのこともたくさんあると指摘している。実際、少数の良心的な人々を除けばほとんどの米国人やヨーロッパ人は、韓国が独自の文明をもっているという事実すら知らないという<sup>29</sup>。特に、韓国は日本と比較するとき、日本を半野蛮の島国としかみていないという事実を指摘する<sup>30</sup>。このときグリフィスは、韓国人が自国の歴史を発展させることができる民族であることを述べようとしていたと理解できる。こうした点からグリフィスは西洋人の韓国観、言いかれればオリエンタリズムを克服しようと努力した歴史家であったといえることができる。

グリフィスは、韓国人が自称する「静かなる朝の国」についても説明している。静かなる朝の国は朝鮮という国号の翻訳だというのである。よって、これを単に“日が昇る”、“露が下りる”は平凡なことばのように、ありのままの事実を表現したり、便宜のためにだけ使用されるだけだと述べている<sup>31</sup>。これに関連して注目しなければならないのは『隠遁の国、韓国』という書名である。これは、グリフィスが韓国を隠遁の国と呼んだことによって有名になったが、韓国人がみずから朝鮮と呼ぶとは異なる。こうしてグリフィスが韓国の否定的なイメージを助長したのではないかという問題については考察する必要がある。

これは、特に近代韓国を隠遁国と規定したのは日本の侵略論を代弁したにすぎないという李泰鎮の見解と関連している<sup>32</sup>。李によれば、韓国が隠遁国であったという認識に最も大きな影響を及ぼしたのはグリフィスだったというのである。そして、日本が「隠遁の国、韓国」というイメージを利用したというのである。これに対しては、近代韓国の真の姿は隠遁ではなくみずから開放を選択したと述べている。それで近代韓国を大院君執権期<sup>vii</sup>と高宗執権期<sup>viii</sup>とに区分しているのである。1873年末、高宗執権期になって開放へと急変したので、隠遁的であるという評価は全く正しくないとする。1876年の朝日修好条規の締結以降も隠遁国という規定は正しくないという。そして、1910年に日本に併合された時、隠遁と鎖国のためにそうならざるを得なかったと解釈したという。

ところが、これをグリフィスに直ちに適用できないのではないかと考える。『隠遁の国、韓国』を通じて、高宗の親政以降、朝鮮が日本との外交関係を積極的に改善しようとした努力に言及しているのである。そして、それが一部の官僚の反対によって霧散した事実にも注目し<sup>33</sup>、朝日修好条規が締結される前後の過程を仔細に扱っている。そして、丙寅洋擾以前にすでに鎖国政策が崩壊していたと強調している。長期にわたって純粋性を保持できた朝鮮の鎖国政策は、キリスト教とフランス宣教師の入国によってその壁が徐々に浸食され、ついにその基盤が崩壊したと説明している<sup>34</sup>。また、グリフィスは朝鮮が門戸開放を行った後も隠遁の国とは見ていなかった。過去には隠遁の国と表現したが、1885年以降についてはもはや隠遁の国ではないと規定したのである<sup>35</sup>。つまり、近代韓国全体を隠遁国とは見なかったのである。

さらに、隠遁の国という呼称は韓国に限ったものでもなかった。グリフィスは日本や中国の場合も門戸開放以前は隠遁の国と見ていたので、韓国を最後の隠遁国と見たのが<sup>36</sup>誇張されて認識されたのではないかと考える。隠遁の国は韓国の特徴ではなく普通名詞だったのである。

<sup>vii</sup> 大院君執権期：朝鮮王朝第26代国王高宗（コジョン）の実父である興宣大院君が、幼い高宗（1863年12月に即位）に代わって政治の実権を握った時期（～1873年）。カトリック教徒に対する厳しい弾圧のほか、対外的に強硬な鎖国政策が取られた。

<sup>viii</sup> 高宗執権期：朝鮮王朝第26代国王高宗が、実父である興宣大院君に代わって親政を開始（1873年）してから退位（1907年）するまでの期間。



何よりもグリフィスは、韓国が隠遁のために滅亡したと考えていなかった。改革を拒んだ両班支配層の問題と理解していた。よって、グリフィスが韓国を隠遁の国と呼んだのは、朝鮮が隠遁国からどのような過程を経て門戸を開放するのか、その過程に関心を向けていたため付けられたのではないかと考える。グリフィスは隠遁の国よりも朝鮮の近代化（文明化）に多くの関心をもって著述したのである。したがって、グリフィスは、使用した用語が一部で否定的な影響を与えたとはいえ、韓国の歴史と現実を客観的に理解するのに多くの努力を傾けた人物であったといえるだろう。

#### 4. 近代の時期設定とキリスト教

グリフィスの『隠遁の国、韓国』はよく知られているように、韓国史の通史といえる。グリフィスは紀元前から今日にいたるまでの韓国の歴史を大きく三つに分けて著述した。第1部は古代・中世史、第2部は政治と社会、第3部は近代・現代史である。第2部を除くと韓国史概説になるといえる。第2部が設定されたのは、シャルル・ダレ<sup>ix</sup>の著述と似ている。もちろん、ダレが『韓国天主教会史』で「序説」<sup>x</sup>を最初の部分に設定したこととは異なる。ダレは朝鮮の歴史も含めて著述したが、グリフィスは第2部で韓国の歴史を理解するのに必要な政治や社会分野について著述した。内容については韓国の生活文化に関連するものが多かった。

グリフィスは初版序文で、紙面が不足していたため第3部の近代および現代史の原稿がかなり要約され、興味深い多くのテーマが掲載できなかつたと述べている<sup>37</sup>。グリフィスが言及している韓国近・現代史の内容は、全体48章のうち10章にも及ぶ分量で、韓米修好通商条約が締結される時期までを扱っている。しかし、韓国近現代史の内容は1906年の第8版で大きく補足された。5つの章が追加されているのである。まず、「経済事情」についての章が追加されている。これは以前の版で政治や社会に言及しながらも十分に扱えなかつた韓国の経済事情を補足するためと理解される。以降、「経済事情」に続いて「内政：甲申政変」、「清日戦争と大韓帝国」、「露日戦争」、「乙巳保護条約」が新たに章として追加された。そして、1911年に最後となる第9版ではさらに1章を加えた。「朝鮮；日本の地方」である<sup>38</sup>。日帝の韓国強占までを扱っているが、朝鮮が主権を失った理由などを再々説明しているところからみて書の結論に該当する。こうして三部の内容が全体としてバランスがとれるようになった。

グリフィスの韓国史著述で注目すべき部分は何よりも時代区分論である。グリフィスは古代史、中世史、近代史、現代史と4つの時期に分けている。これは、ハルバートの韓国史著述にも見られる<sup>39</sup>。よって、韓国史の著述でこうした時代区分が適用されたのは、おそらくグリフィスの書が初めてではないかと考える。

ここで注目しなければならないのは近代の時期設定である。ハルバートは朝鮮の建国を近代の始まりと設定している。ところが、グリフィスはキリスト教の受容を基準にしている。つまり、近代の時

<sup>ix</sup> シャルル・ダレ (Charles Dallet)；パリ外国宣教会 (La Société des Missions Étrangères de Paris) 所属の宣教師 (1829～1878年)。第5代朝鮮教区長ダブリュイ司教 (1866年に殉教) が収集・整理した資料をもとに、1874年に『韓国天主教会史』(原題：Histoire de L'église de Corée) を著した。

<sup>x</sup> 『韓国天主教会史』の「序説」；金容権による和訳がある (『朝鮮事情』、東洋文庫、1979年)。

期設定をキリスト教と関連させて把握しているのである。中世史の最後でハーメルンの漂着を扱っているが、これは、グリフィスが朝鮮と西欧との邂逅においてキリスト教という要素がいつ、どのようにして朝鮮に伝わったのかに注目していることを示している。

近代の受容をキリスト教と関連づけて理解するのは、グリフィスの次のような言及を通じて把握できる。

封建的な日本で生活した私にとって、キリストなき日本とキリストなき韓国は異なるところはないと考えたからである。慣習、社会生活、悪政、民に対する抑圧、迷信や奇異なことなど、基本的な特徴において半島の文明の本質は日本とほぼ同じか完全に等しいといえることができる。真正のキリスト教が渡来する前の、改革がなされていないアジア諸国はすべてが似たり寄ったりである。イエスに対する信仰が人々の心に吹き込まれて初めて古代的な歴史が終わり、近代的な歴史が始まるのである。しかし、真理の聖殿がそびえたつ前に、まずキリスト教は古い建物を粉々にして廃墟にしてしまう<sup>40</sup>。

ここでグリフィスは古代と近代を分ける基準について説明している。キリスト教が受容されることによって古代的な歴史が終わり、近代的な歴史が始まるというのである。こうした点は『隠遁の国、韓国』第1部の最後でも確認できる<sup>41</sup>。世界の他の国家と同じように、朝鮮は古代史の扉を少しも開いていなかったが、キリスト教が彼らの心を動かすや近代史の扉を開いたというのである。このようにグリフィスはキリスト教の受容とともに歴史解釈に新たな変化が起こったと考えていた。

このように宗教や精神を歴史研究の重要な要素ととらえるのは、グリフィスの歴史観からうかがえる重要な特徴である。

アジア民族の歴史は歴史的事実や王朝の歴史であると同時に、彼らの精神的、心理的歴史として取り扱うべきものである。よって、朝鮮民族のようにほとんど知られていない民族の歴史を著述するにおいては、我々は実際に発生したと確信している諸事実を記述する努力と同じほどに、実際に発生したと彼らが信じている諸事実を記録するのが重要だと考える。我々はある民族を理解するために、彼らが置かれた実際の環境はもちろん、彼らの精神世界を知らなければならない<sup>42</sup>。

グリフィスは、民族の歴史は王朝の歴史であると同時に精神的、心理的歴史として取り扱わなければならないと述べている。よって、ある民族を理解するためには、彼らが置かれた実際の環境はもちろん、彼らの精神世界を知らなければならないと強調した。

これは、グリフィスが韓国の宗教について深く関心をもっていたという事実からも知ることができる。グリフィスは韓国の宗教を原始信仰、仏教、儒教と把握していた。道教についての研究はあまりないものと見ていた<sup>43</sup>。韓国史の流れの中で原始信仰から仏教、儒教へと転換する過程を何か所でも扱っている。何よりも朝鮮の原始信仰、つまり巫俗が—グリフィスはこれを迷信とも呼んでいた—過去2千年間、一般的な変化を示さなかったと見ていた。それは、仏教の興隆・衰退とも深い関連があった。千年以上、輝かしい歴史を展開してきた仏教が世俗化し、ついには腐敗してしまって表れた現象だという。朝鮮が建国され、儒教が両班の思想として国教の地位を確保したが、平民は自分たちの宗教指導者を奪われ、牧者なき羊の群れとなってしまった。このとき仏教は農民たちの思想として

定着したが<sup>44</sup>、原始信仰と密接に結びついて新たな様相を呈したと理解した。その結果、仏教教理によって高揚された韓民族は、再度原始信仰と鬼神崇拜へと転落してしまったという<sup>45</sup>。グリフィスは中世の輝かしい仏教文化と比較するとき、こうした変化を根拠に国家が全般的に退行したと理解した<sup>46</sup>。

一方、グリフィスは儒教をきわめて辛辣に批判している。儒教倫理が民衆に対する専制主義特権層の権力維持に益するものと考えたのである。仏教は民衆的、民主的要素を涵養することによって下層階級にも学問をさせたが、儒教は学問を少数の特権階級に限定したことから民衆に教育を受けなかったというのである<sup>47</sup>。むしろ民衆に学問が普及するのを嫉視して監視したという<sup>48</sup>。なぜならば民衆が学問をするということは、両班権力が終わることを意味するからである<sup>49</sup>。したがって、グリフィスは儒教的官吏が最も嫌うことが大衆のための教育改革であるととらえていた。グリフィスは儒教を朝鮮滅亡の主要因と把握していたのである。

それから、グリフィスは祖先崇拜の問題を指摘している。祖先崇拜思想は早くから表れていたが、儒教と結びついてさらに大きな意味をもつようになったと考えた。それが葬祭礼に見られるように韓国社会において大きな問題となると理解した<sup>50</sup>。よって、グリフィスは『隠遁の国、韓国』の献辞で明らかにしているように、韓国民族がこのような原始信仰、そして異教および儒教から離れる時期に注目するようになった。ここでキリスト教の問題が登場するのである。キリスト教の受容とはこうした世界観から脱け出し、新しい価値を植え付けることだからである。言い換えれば、グリフィスは韓国社会でどのようにしたらキリスト教が受容されるのかという問題に集中的に関心を向けたといえるだろう。

韓国古代史の著述においてキリスト教の問題が重要なことは第2部の最後の文章を通じて容易に理解できる<sup>51</sup>。異教や迷信、儒教は朝鮮に根付き、教育においてそれぞれ影響力を及ぼしているが、キリスト教が18世紀に入り、朝鮮知識人の小さな瓶の中にどんぐりの実を植え付けたという。そして、第3部ではその種がどのようにして播かれ、どのようにしてそのか弱い幹が成長し、どのようにしてその生命が今に至るまで存続しているのかという問題を紹介しようとした。

韓国近代史が始まる第39章では、まずカトリックの受容問題を扱っている<sup>52</sup>。ここで代表的な日本専門家であるグリフィスは、日本からのカトリック受容説には従っていない。グリフィスは韓国のカトリック受容過程について明快に結論を下している。グリフィスは、壬辰倭乱当時の1592年に倭兵によってカトリックが朝鮮に伝来したと考える学者がいるにはいるが、少なくとも18世紀末頃まではカトリックが大衆的に知られてはいなかったことはほぼ確実だという。18世紀に朝鮮に東ではなく西からカトリックが伝わったというのである。

このような事実は中世史の壬辰倭乱においてさらに具体的に言及されている<sup>53</sup>。グリフィスは壬辰倭乱の勃発動機として、豊臣秀吉がカトリック指導者たちを外国に送って死なせることによって日本国内のカトリックを抹殺しようとする陰謀が込められていると述べている。カトリック信者たちを海外に送って彼らが負傷や疾病で死ぬことが、彼らを大量虐殺するよりも簡単だというのである。

同時に、セスペデス神父<sup>XI</sup>の朝鮮での活動について扱っている<sup>54</sup>。このとき朝鮮にいた倭軍やセスペデスによってキリスト教の種は播かれなかったと見た。むしろ日本で活動した朝鮮人信者たちの動

<sup>XI</sup> セスペデス神父；イエズス会宣教師。1593年、豊臣秀吉による朝鮮侵略の際にキリシタン大名小西行長の従軍司祭として朝鮮に渡った。

向を伝えている。小西行長が日本に送った幼いヴィンセントが宣教師となって朝鮮に派遣されたが失敗に帰した話が記されている。そして、日本でカトリックに改宗した多くの朝鮮人が信仰を守って殉教した事実も語られている。これもまた日本カトリック教会史のことと理解し、その結果、その2世紀後まで朝鮮でのカトリック受容は遅れたと考えた。

これについてグリフィスは、第3部最初の章で中国からカトリックが伝わる過程を具体的に著述している。1777年に李檠<sup>xii</sup>によってカトリックが受容され、李承薫<sup>xiii</sup>が中国で受洗したのが1784年と記している。これは、グリフィスがシャルル・ダレの見解を受け入れたものとみられる。グリフィスは1784年を近代の始まりを告げるものと述べる。ここでグリフィスが近代の成立が韓国人によって自発的になされたとみている点は注目してよいのではないかと考える。これは、一般的に開港を近代の始まりと見る時代区分とは大きく異なる。なぜならば開港とは他律的だからである。そうであれば、グリフィスによれば、韓国の近代史は韓国人によって主体的に始まったが、西欧列強の侵略とともに主権を喪失したと理解していたといえる<sup>55</sup>。

グリフィスは近代の設定をカトリックの受容ととらえたが、実質的な近代はプロテスタントの受容とともにとらえているようだ。献辞で言及された純粋宗教、そして前の引用文で言及された真正のキリスト教とはカトリックではなくプロテスタントだったからである。グリフィスは宣教師が入ってきた時期の変化に注目している。ここにはグリフィス自身がプロテスタントの宣教師だったことも関係していると考えられる。同時にプロテスタントよりも早く入ってきたカトリックが東アジアでそれほど社会的意味をもちえなかったとみるグリフィスの見解とも一定の関連があるだろう<sup>56</sup>。これは、1885年に朝鮮に入国した米国出身のアペンゼラー牧師を近代の先駆者 (Modern Pioneer) ととらえていることからもうかがい知ることができる。グリフィスは韓国近代史をカトリックとプロテスタントの受容および拡散と密接な関係を有するものにとらえていたのである。

## 5. 西欧列強の門戸開放政策に対する批判

朝鮮の門戸を開放してキリスト教を伝えようとしたグリフィスは、西欧列強の門戸開放政策にきわめて批判的であった。それは力による帝国主義的方式の開放政策だったため、正しくないともたからである。

この点においてグリフィスはカトリックの宣教方式を強く批判した<sup>57</sup>。グリフィスは朝鮮とその他のアジア各地で行われていたローマ・カトリックの福音化方法が道徳的に脆弱だと指摘している。特に朝鮮のカトリック信者が祖国に対する反逆者の役割を果たしていることを問題とした。黄嗣永帛書<sup>xiv</sup>に記録されているように、外国の軍事的な侵略を誘発したというのである。

これは信徒だけの問題ではないとみた。フランスの宣教師たちがフランス軍と侵略者の尖兵もしくは艦砲の手先として入国したという事実は単なる幻想ではなく事実だと述べている。フランスの司教がフランス軍艦の謀者であり道案内役であって、フランスの神父が海賊行為の案内者だったことはカ

<sup>xii</sup> 李檠 (イ・ピョク)；早くからカトリック関連の漢文書籍を通じてカトリックに関心を持ち、1783年に朝貢使に従って北京に行くことになった李承薫に対し、北京で神父から洗礼を受けるよう勧めた。李承薫の帰国後、彼から受洗した。

<sup>xiii</sup> 李承薫 (イ・スンフン)；1783年、朝貢使 (冬至使) に随行する父親に付き従い、北京滞在中にカトリック神父 (グラモン神父) から洗礼を受け、朝鮮人最初のカトリック信者となった。

<sup>xiv</sup> 黄嗣永 (ファン・サヨン) 帛書；韓国カトリック教会初期の指導者のひとりである黄嗣永が、1801年に起こった迫害 (辛酉教難) の経緯と対応策を絹に書き留めて北京のグベア司教に送ろうとした密書。

トリック側の記録であってカトリックの敵が記録したものではないという。ここでグリフィスはオッペルトによる盗掘事件<sup>xv</sup>などでみられたカトリック神父たちの活動を具体的に問題としている。

グリフィスは善を行うためならば悪を行っても良いという不法で誤った教理は、フランス神父たちの聖なる望みの光を失わせることになると言及している<sup>58</sup>。グリフィスはそのような教理が新約聖書を冒瀆することであると同時に、カトリック教会が最もよく援用する詭弁だと批判する。要するに、彼らが信者たちを誤導したと非難されうるといっているのである。

したがって、グリフィスは丙寅洋擾<sup>xvi</sup>に対しても批判的だった<sup>59</sup>。本国政府の承認を受けていないフランス艦隊の朝鮮侵略を無謀な侵略と規定したのである。丙寅洋擾は東洋全域にも悲劇的な結果をもたらしたが、特に中国で外勢に対する敵愾心を引き起こしたという。朝鮮では外国人ならフランス人と思うようになった。丙寅洋擾によって迫害を受けた多くのカトリック信者の血によって、外国人が残した汚点を洗い流せるかもしれないとまで述べている。

これはオッペルトによる盗掘事件でも同様である<sup>60</sup>。この事件によって朝鮮人は、外国人が入国する主な目的が死体を掘り起こして人間の最も聖なる本能を棄損することだという疑惑が厳然たる事実として立証されたという。もはや疑いの余地もなく朝鮮人は西洋人が野蛮で、彼らのほとんどが盗賊だと確信するにいたったという。つまり、この事件によって朝鮮人は外国人に対する誤った認識を植え付けられたという。

グリフィスはフランスだけではなく、アメリカの動きにも同様の立場を取った。ジェネラル・シャーマン号事件<sup>xvii</sup>の場合も、朝鮮との通商交渉のための試験航海というが、そう見るには困難なほどに重武装していたため、その航海の性格については疑わしいという<sup>61</sup>。また、事件の発生原因として乗務員の最も近い親戚さえも平壤住民に対する船員の残酷で冒瀆的な行為が契機となったとの疑いを隠せないと述べている。サプライズ号に対して示した朝鮮人の好意を覚えている米国人としては、偏見なく公平な人物ならシャーマン号の乗務員が何の理由もなしに殺害されたと信ずる者はないという。それは、ジェンキンスの場合も該当する。米国と通商条約が締結されていない朝鮮に対して暴力を用いて上陸を試みたとして、米国市民ジェンキンスが起訴されたことを紹介している<sup>62</sup>。

辛未洋擾<sup>xviii</sup>についても同様である<sup>63</sup>。米国はロジャース提督率いる艦隊を朝鮮に派遣したが、ロジャース提督は平和の勝利よりも戦争の勝利に関心をいだく人物だったという。彼らが朝鮮人に最初に与えた贈り物がビールだったという事実もきわめて奇異なことだという。当時、朝鮮人に与えた新聞に、すべての民族は個人と同様に道徳的責任感をもって行動せよという原則を主張したサムナーという人物の写真が掲載されていたという事実も、こうした矛盾をよく説明しているという。

何よりも朝鮮側からの艦砲射撃に対して戦争を行ったという主張を批判した。グリフィスは星条旗

<sup>xv</sup> オッペルトによる盗掘事件：1868年、ドイツ商人オッペルトが忠清道徳山にある大院君の父(南延君)の墓を盗掘した事件。オッペルトは1866年に二度にわたって朝鮮に通商要求を行ったが拒絶された。そこで、米国人ジェンキンスの支援を得て朝鮮に向かったが(このとき水先案内人としてフランス人宣教師と朝鮮人信徒も同行していた)、通商の要求は行わず、南延君の墓を盗掘した。おそらく掘り出した棺を引き渡すことを条件に朝鮮政府に通商を認めさせようと目論んでいたのではないかと考えられる。大院君は激怒し、対外強硬姿勢を一層強めることになった。

<sup>xvi</sup> 丙寅洋擾：1866年、朝鮮で活動していたフランス人宣教師9名が処刑(丙寅教難)されたことを受け、ローズ提督の率いるフランス東洋艦隊が同年中に江華島を攻撃した事件。大院君による徹底抗戦によって撤退。

<sup>xvii</sup> ジェネラル・シャーマン号事件：1866年、米国商船ジェネラル・シャーマン号が大同江を遡り平壤で通商を要求したが、朝鮮側に狼藉をはたらいたため戦闘となり、船長以下全員が殺害された。

<sup>xviii</sup> 辛未洋擾：1871年、米国が朝鮮に対してジェネラル・シャーマン号事件に対する謝罪と通商を要求するため、ロジャース提督率いるアジア艦隊を派遣し、江華島を攻撃した事件。大院君による徹底抗戦と通商拒否のため撤退。

を冒瀆されたことに対して報復するという考えを捨て、戦争にまでエスカレートしないように努めなければならなかったという。つまり、ロジャース提督は朝鮮人の立場に立って判断し、指示しなければならなかったとし、最悪の場合は戦争ではなく朝鮮から退却しなければならなかったという。しかし、結果はそうならなかったのである。よって、今回の事件によって朝鮮の保守的な政治勢力はフランスと米国に対する抵抗は成功したとして、「外国人が攻め込んできたとしても我々はびくともしない」という反応を示したというのである。

グリフィスが朝鮮に対する西欧列強の動きを批判した基準は道徳であった。何よりも西欧列強のこうした行動は、グリフィスによれば道徳的でないというのである。フランス宣教師の行動だけではなく、グリフィスは辛未洋擾についても道徳的に判断するなら米国人は自分が侵犯した朝鮮に対して何も主張できないと言及している<sup>64</sup>。それはキリスト教の教えに反するという。

グリフィスは朝鮮に派遣されるキリスト教宣教師は、ギリシア正教、ローマ・カトリック、プロテスタントの違いはあってもイエス・キリストが何度も説いた道徳的な純粋性に重きを置き、キリスト教教理を教え実践しなければならないと強調している<sup>65</sup>。要するに、反人道的な行為を行ってはならないという。

それは、グリフィスが1871年のロジャース提督の遠征によって、血塗られた韓国に霊的な農夫を送らなければならないという義務感、さらには平和の王の福音をもたらすためにはキリストに満たされた人物が行かなければならないという義務感をキリスト教国の米国に問いかけたことからも十分にうかがい知ることができる<sup>66</sup>。これはグリフィスのキリスト教的道徳史観といえるだろう。

したがって、グリフィスは朝鮮の門戸を開放させようとするなら、韓国民族を無視せず、武力よりも平和的に行わなければならないと強調する。日本が朝鮮との国交樹立のために用いた方法も、ペリー提督が日本の開国に際して用いた方法をまねたものだと批判する<sup>67</sup>。グリフィスは米国と朝鮮の国交樹立の過程に大いに注目している。特にシューペルトの外交活動について大きな意味を与えている。

グリフィスは何よりもそのアプローチに注目している<sup>68</sup>。海軍外交官であるシューペルト提督は1882年、陸海軍の援助をほとんど受けることなく、外交によって1853年にペリーが遂げた業績を完全に凌駕する成果をあげたというのである。ペリーが強力な艦隊と高価な武器によって日本から獲得したのは、疲れ果てた船員のために2か所の港を開港させたことだった。1882年、済物浦でシューペルト提督が朝鮮と結んだ条約は30年前にペリー提督が日本と結んだ条約よりも範囲がはるかに広いとみた。これを通じてシューペルト提督は米国人の貿易、商業、居住が認められるようにし、教師や宣教師が入国できる道を開いたのである。グリフィスは、ほぼ1年間の集中的な努力の末に最も円満な方法で交渉が妥結し、韓米条約が紆余曲折の後に勇敢な軍人シューペルト提督によって締結されたという点に意味を見出した。

ところで、グリフィスはシューペルトの偉大な勝利があまり注目されていないことを残念がっている<sup>69</sup>。米国政府から表彰され、感謝されるどころか無視されてしまったという。これにはワシントンの疎外された政治家たちの嫉妬心も大きく作用したのだと見た。グリフィスは米国の対中国政策で平和的な政策を擁護していたキャンプが、大統領や上院から無視され大衆に知られていなかったように、シューペルトも実際の名声とは距離がある人物だと述べている。戦士として戦場で血を流す勝利者が大衆の記憶に最も強烈に刻み込まれるが、そうであってはならないというのである。

グリフィスはあらためて強調する。極東で米国の外交的職務を遂行するにあたって、2つの人種間

の正義のために、キリストの国がこの地に来るようにするために、力による勝利よりも理性の勝利、そして戦争の勝利よりも平和の勝利を掲げるという究極的な文明実現するために、シューペルトやキャンプの役割に注目している。彼らほど健全で公平な政治家像をうちたてた人物はいないとして称賛した。ところが、シューペルトはそうした理想的な外交活動にもかかわらず、それを最後に長くて輝かしい職業軍人としての生涯に幕を下ろしたという。

あれほどまでに西洋列強による朝鮮の門戸開放を望んだグリフィスの『隠遁の国、韓国』初版が、シューペルト提督の韓米条約締結を控えて出版されたのも、こうした点から参考のできるだろう<sup>70</sup>。それは、韓米修好通商条約がグリフィスが望んだ方法によらなかったからである。

## 6. 近代的人間の形成とプロテスタント

米国との修好条約締結以降、朝鮮のプロテスタント受容が本格的になった。韓国近代史の中でプロテスタントがどのような社会的役割を果たしたのかをグリフィスの著述を通して考察してみたい。グリフィスは『隠遁の国、韓国』初版の最後の章で、門戸開放以降、韓国の将来がどのようになるのかについて質問を投げかけ、世界の版図がどのように変わろうとも朝鮮で異教、頑迷、迷信が消え去るという希望を捨てまいと語る<sup>71</sup>。その際、朝鮮でもキリスト教、科学、教育、人道主義的兄弟愛が永遠に定着できる場を見出せるかもしれないという。

当時、プロテスタント信者の数はたいしたものではなかったとグリフィスはとらえていた。少なくとも数人の生存者とともに一歩ずつ前進しているとみていた<sup>72</sup>。ところが、1884年の甲申政変の失敗が新たな契機を提供したとみた。この流血事件は、科学的キリスト教が伝来する扉を開いたという<sup>73</sup>。米国の宣教師で医師のアレン牧師が閔泳植を治療したことがきっかけで広恵院が設置されたからだ。1885年のアペンゼラーの入国はもうひとつの分岐点になった。アペンゼラーは朝鮮をキリスト教化するにあたっての礎石のような存在だという<sup>74</sup>。以来、米国宣教師の入国が続いた。彼らの活発な活動とともに1904年には数万人の信者を獲得した<sup>75</sup>。日本による韓国強占後の1911年になると、信者数が20万に達するまでになった<sup>76</sup>。それでグリフィスはこの時期を韓国プロテスタントの伝播において最も栄光な時期ととらえた。だれもが韓国でこのような驚くべき変化が起ころうとは予測するのが困難だったという<sup>77</sup>。よって、グリフィスは朝鮮が世界で最も希望ある宣教地になったと語る。韓国でキリスト教の理念が人間の生活を支配する新たな時代が開けたと見たのである。

このように韓国でプロテスタントが大きく成長できた要因として、グリフィスはいくつかの点を挙げている。何よりも宣教師がそうした変化をもたらした主役とみた<sup>78</sup>。グリフィスは『アペンゼラー』の著述を通じて、当時の宣教師の活動を具体的に説明している。グリフィスは朝鮮のことを真心から思うプロテスタント宣教師たちの献身的な努力が無かったら、新しい日本や近代化した中国のように文明化した韓国も存在していなかっただろうと述べている<sup>79</sup>。

次に、聖書のハンゲル翻訳を挙げている。グリフィスは、日本と比べて韓国が速く福音化したのには聖書が自国語で平民に伝えられたことがあると指摘している。特権や地位を有する韓国の学者たちはハンゲルが学習しやすいという理由で、これを‘汚らわし文字’と貶めたが、宣教師はこの軽蔑された漆器を天の宝物を入れる器にしたという<sup>80</sup>。グリフィスもハンゲルが漢文の洪水の中に巻き込まれて跡形がなくなっていくのを目撃しながら、グリフィス自身が韓国の知識人に韓国語を開発するよう促したと述べている<sup>81</sup>。

そして、グリフィスはそれが韓国の知識人によってではなくプロテスタントの宣教師によって主導されたと強調している。これは宣教師の韓国語に対する関心が、韓国の文学や歴史の宝庫を開いたことからわかると述べている<sup>82</sup>。その結果、彼らがハングルで書いた国家や民族に関する著作物が今では非常に貴重なものとなっていると指摘している。何よりもこうした業績は、信憑性の面からみると観光客や駆け足で回った旅行者が残した素描や断片的な著作とは好対照をなしているという。

また、グリフィスはプロテスタントの宣教方法が韓国人に教理や倫理条項を複雑に提示しなかったことに注目している<sup>83</sup>。これはカトリックの宣教方法と比較して説明されている。ローマ・カトリックとギリシア正教会の宣教師は、古い諸国家の異教主義を改めるのにほとんど役割を果たせなかったという<sup>84</sup>。受容以降、かなり時間が経過したにもかかわらず国家や社会にこれといった変化を引き起こせなかったととらえていた。そこには人間個人の罪が強調されておらず、教会の意識や慣習に対する攻撃だけが強調されているため、社会大衆の中に麴を植え付けることができなかったという。しかし、プロテスタントは教育、病院などを通じて社会大衆とともにあったと主張している<sup>85</sup>。よって、グリフィスはプロテスタント宣教師が仏教やローマ・カトリックの方式に依らなかったことを非常に妥当なこととだとみた<sup>86</sup>。

何よりもここで注目しなければならないことは、グリフィスがプロテスタントを通じて文明を再創造することができる点である。プロテスタントは聖書を通じて人間を良心に目覚めさせ、思考を喚起させるという。そこで、新しい福音のメッセージは家庭を革命的に変化させ、民族の文学や芸術を再創造し、結局、新しい国家を創造するというのである。グリフィスによれば、プロテスタントの受容というのは、古代的な社会体制の土台となった過去の諸事実に対する新たな解釈や人間を再創造する力を要求するからである<sup>87</sup>。平凡な人間がキリスト教を通じて新しい眼目をもつようになれば、彼は専制者や特権層・支配者が最も恐れ、憎み、反対する類の人間になるというのである<sup>88</sup>。

したがって、グリフィスは朝鮮人の場合、キリスト教信者になるということはその人間の生活において全面的な革命を意味するとみた<sup>89</sup>。特に女性の価値を貶め、人間の知識を狭める儒教の束縛の中で長い間縛られてきた朝鮮の人々の心の中にキリスト教が入り込んでくると、自分以外の他の国や民族について考えるようになり、自分の心情を探求し、自分の隣人の福利増進のために行動するようになり、さらには全世界に対して新たな見解をもつようになるという<sup>90</sup>。よって、プロテスタントによる新たな文明の創造は、結局、新しい人間を創造することを告げてくれるという。科学とキリスト教に基づく近代的人間の形成である。

ところで、近代的人間の形成とは教育を通じてはじめて可能になる。グリフィスは韓国に留まっているプロテスタント宣教師が教育に深い関心をもっていたと述べる<sup>91</sup>。なぜならば教育とは国家や民族を理解し、人間の社会的、政治的問題が何であるかを認識させることだからである<sup>92</sup>。それは、アペンゼラーの教育方法を通じて考察することができる<sup>93</sup>。アペンゼラーの教育とは学生に考えることを教えることであった。それは訓練の強調点を暗記から判断へ、観察力を洞察力へと変化させ、学生に原因を問うように教え、人間関係という永遠の法則を体得させることである。そして、それは男らしい精神や騎士道に力点を置いた。勤勉は尊敬すべきもので、正直な労働、さらには肉体労働も報酬を受け、尊敬を受ける価値があると教えた。

グリフィスはプロテスタントによるこうした教育は、朝鮮の両班が追求する教育とはまったく異なると指摘している<sup>94</sup>。アジア各国の儒教官吏が最も嫌うのがキリスト教教育だという。なぜならば民



が教育を通じて開化すれば自分たちの権力が終わってしまうからである。しかし、プロテスタント宣教師は大衆教育に大いに関心を寄せているという。これを通じて両班という階層の独占物としての教育が消滅したとみた。そして、西方世界の進歩的な国家の特性になっている知的中間層の形成を迫ることができると考えた。なぜならば、現在、朝鮮にはこのような知的中間層がないからである<sup>95</sup>。よって、こうしたキリスト教教育を通じて近代的なものに対して暗かった人々の目を開かせることができるというのである<sup>96</sup>。

グリフィスはこうした教育を通じて宣教師が朝鮮に蔓延している鬼神崇拝の古い体制を崩壊させ、両班のすべての特権や女性の奴隷状態、低劣な祖先崇拝をおかしなことだと考えるようになることを望んだ<sup>97</sup>。そればかりでなく、公平な法に基づかずに支配し、千二百万の人々を抑圧して専制体制のために奉仕する政府を壊してしまうことを望んだ。そして、その場に民主主義という新しい精神がプロテスタントを通じて入り込むのを見ようとした。朝鮮が国家の尊厳性を維持するために外面的な制度や内面的な意識を同時に改造するとき、プロテスタントが寄与できると見ていたのである。

ところが、こうした米国宣教師の教育はあらゆる面で朝鮮人の気質と調和できないとみた<sup>98</sup>ため、初めは非常に困難だった。それは朝鮮人にとっても同じであった。どんな民族でも一日では不可能という事実を朝鮮人が徐々に、そして苦痛を伴いながら学んでいるという<sup>99</sup>。それにもかかわらずプロテスタント宣教師は朝鮮人に必要な人間性の啓発のために立派に働いており、今後もそうすると約束していると述べる<sup>100</sup>。なぜならば朝鮮人がプロテスタント宣教師の訓練のもとに新しい行動の動機を得て、新しい精神を支えるための糧食を食しながら新しい世代へと浮上することを望んでいたからである。韓国が究極的には韓国人牧師によって福音化されなければならないということもこうした点と関連がある<sup>101</sup>。それは、プロテスタント宣教師が、日本と同じように朝鮮も彼らによる教育を通じて富強となって世界の舞台で西欧列強と同等の地位を確保することを望んだことと関連がある<sup>102</sup>。キリスト教が朝鮮を飛躍的に成長させることができるというのである。

グリフィスは韓国近代史におけるプロテスタントの活動を米国と関連付けて総合的に整理している<sup>103</sup>。米国がアジアに残した足跡はヨーロッパが残したものとは異なると述べている。征服、戦争、経済的搾取によって遂げたものではないという。それは薬局、病院、学校、教会であり、また教師、名誉ある商人、献身的な宣教師が残した足跡だという。よって、グリフィスは、米国人は1世紀余りの間、アジア人を征服して僕とするために存在するのではなく、彼らが治療を受け、教育を受け、人間として待遇されるために存在すると信じてきたが、実際にその通りに実践したと力説している。

## 7. 日帝の韓国強占に対する支持

このように朝鮮の独立と発展を望んでいたグリフィスは、日本による韓国強占を支持することになる。なぜそうなったのか引き続き考察する必要がある。

まず、グリフィスが把握したようにプロテスタントの教勢が絶えず成長していたので、その原因を探るべきであろう。なぜならばプロテスタントの教勢が拡大した時期が問題となるからである。グリフィスは露日戦争と日本の朝鮮強占以降にプロテスタントの教勢が大きくなっていると明らかにしている。既存の研究によれば、清日戦争後から表れていた現象だという<sup>104</sup>。王朝崩壊期の朝鮮においてほとんどすべての人々が経なければならなかった危機状況の中で多くの改宗が起こったという。つまり、清日戦争、露日戦争、乙巳勒約、庚戌国恥といった国家的災難、危機の中で米国宣教師の宣教事

業はとりわけ大きな成功を収めることができた。よって、キリスト教伝統のない朝鮮での回心や改宗は、ほとんどが危機とともに起ったと言及されている。改宗者が大きく増加し救われる個々人は増えた一方、それが民族の救済のための大々的な努力へとは結びつかなかったと説明されている。

だが、こうした見解をすべて受け入れることはできないだろう。なぜならばグリフィスによれば、1903年当時、プロテスタント宣教師は朝鮮人信者に自らを助け、自らを繁栄させることができる偉大な教訓を引き続き教えていたからである。そして、戦争や迫害、多くの試練が朝鮮のプロテスタント信者に試練を課していても、彼らが強く耐え忍ぶことができる信実さと能力は世界のどの人々にも劣らないと見ていたからである<sup>106</sup>。しかし、それは続かなかつたのではないかと考える。これは、グリフィスが朝鮮のプロテスタントを通じて望んでいたこととは大きく異なる現象だといえる。プロテスタント信者の増加は明らかに喜ばしいことだが、グリフィスは個人の救いが社会や国家の救いにまで及ばなければならないと信じていたのである。プロテスタントの教勢が引き続き増加しているとはいえ、それは問題があるからである。グリフィスの関心は、こうした現象を生み出した韓国社会の構造的な問題に向かったのではないかと考える。

実際にグリフィスは韓国社会の構造的な問題に深い関心をもっていた。朝鮮社会を実質的に動かしている政治勢力が朝鮮の独立を維持できるのかという問題である。前に言及したように、グリフィスが日本による韓国強占を初めから支持していたわけではなかった。したがって、『隠遁の国、韓国』初版を著述する際、朝鮮の独立が維持できるという期待が充分でなかったため、態度を変えたのではないかと考える。それは第8版で補足された内容を通じてその大筋を把握することができるだろう。

第49章でグリフィスは、もし朝鮮人が国家の尊厳性を維持しようとするなら外形的な制度や内面的な意識を合わせて改造しなければならないと見ていた<sup>106</sup>。かつて隠遁の国だったころにきわめて不十分だった朝鮮の社会的、政治的体制は、執拗で貪欲な外国人による侵略の衝撃に耐えられないことをみずから立証してしまっただけでなく、今後は自身の体制を全面的に再生できない限り列強による無慈悲な欲望に対抗し防御することができないというのである。そして、この世界がひとつの兄弟となった今日において、単一の文化基準と単一の国際法があるが、すべての人間はこれを遵守しなければならないのである。この基準に従わない民族や王族は歴史の場から消え去るという事実を強調した。同時に戦争による強大な暴風と20世紀の経済的台風の中心地に陥った状態で、民が最も恐れているのは自分たちの国家が消滅してしまうかもしれないということだと述べている。

第51章でグリフィスは、清日戦争後、朝鮮の政治においてあらゆる組織を一新しようとする試みがあったと述べている<sup>107</sup>。朝鮮の知識人が新しい知的風土や西欧の文化を模索し始めたという。明治維新当時の日本のように数十名の学生が外国に派遣され、多くの外国人が雇用されたという。しかし、具体的な改革が進められると、朝鮮の慢性的な困難が数えきれないほど露呈したという。両班社会の陰謀や嫉妬が絶えず改革を妨害したのである。また、本質的な問題として、王室の機能を政府の機能から分離することが難しかったことも指摘されている。

第53章でグリフィスは、朝鮮が清日戦争と露日戦争を経て、その国際的位置が大きく変わったとみていた<sup>108</sup>。第8版序文で指摘しているように、ロシアに対する日本の勝利の帰結が何なのかを示し、さらにそれ以上の問題についても暗示できると述べている<sup>109</sup>。つまり、2度にわたる戦争の必然的な結果として、韓国が外交関係においてなぜ主権を喪失したのか、その理由が明確に表れているとみた。要するに、朝鮮が開港以降に展開された国際関係の中で、勢力変動とともに日本の保護国となったと

いうのである。

それにもかかわらず、このときもグリフィスはもし朝鮮が指導者の献身的な忠誠心と勤勉さによって近來の政治的、経済的条件の中で生存するのに適合した国家になるならば、ロシアに対する日本の勝利は朝鮮をさらに強くすることにもなると見ていた。もし朝鮮の子弟がそうした機会を利用できる能力があったならば、朝鮮の独立は保障されるだろうと述べている<sup>110</sup>。

このときグリフィスは、朝鮮を周辺情勢に調和させることが、かつての日本のとは違って極めて困難だと強調している<sup>111</sup>。かつての日本の場合に非常に効果的なことが韓半島では欠如しているのである。日本の場合、オランダ商人を通じて2世紀にわたってヨーロッパと交流をもつことで西欧思想の受容による長い準備期間が可能で、日本の歴史学者たちも研究を通じて自国の歴史から靈感を得、己を犠牲にする精神をもっていたという。よって、日本は新しい条件や状況を立派に克服することができたと理解した。

ところが、朝鮮はそうではなかったとグリフィスは見ていた。グリフィスは両班と侍を比較している。両班と同等の優越と特権を享有している侍は封建体制を崩壊させただけでなく、自分たちの世襲的特権をも放棄し、生産階級と手を携えたという。ところが、朝鮮の両班は迷信や儒教に縛られ、仕事場に出ることを忌避しているというのである。特に10分の1に相当する両班が前近代的な特権を維持していたことや、祖国のために自分を犠牲にできる者が少なかったのが問題だと述べている。朝鮮でも知性的な愛国者がこれから実行しなければならない課題は、王と民をさらに密接に結びつけ、両班の権力を弱め、封建的な因習を除去しなければならないことだという<sup>112</sup>。

ところで、1866年以来、支配階級が致命的な脆弱さを露呈してしまった朝鮮は、露日戦争以降もそうした問題をさらに悪化させたという<sup>113</sup>。特権両班は国家のために忠誠を尽くして献身するかわりにソウルを陰謀の温床にしたほか、朝鮮を極東の暴風地帯にしまったのである。ところが、両班陰謀者たちは民族の存立を危険にさらしてしまったことを彼ら自身気づいていないという。露日戦争を戦った日本は、王室と政府の区別さえもできていない隣国を、かつてのように陰謀の温床として放置することは自身の存立を危うくするかもしれないということにはっきりと気づいたというのである。日本が自国の存立のために朝鮮を保護国化し、さらには強占したというのである。

このようにグリフィスは、朝鮮は自国を取り巻く列強の勢力均衡が崩れた結果、朝鮮支配層の問題によって結局滅亡したと見た。ここでは、グリフィスが初めから日本の侵略意図をさほど強調していない点は注目される。それは征韓論に対する説明からもうかがうことができる。征韓論が2回とも失敗に終わった後、日本はその事件を通じて古く混乱した要素を拭い去り、より広く未来を見ることができると目をもつようになったというのである<sup>114</sup>。このようなグリフィスの見解は、韓国の学界が初めから日本が韓国を併合しようとしていてついにそれを実現させたと見る立場とは、結果は同じであっても大きく異なるといえる。グリフィスは、たとえ日本が朝鮮を併合しようとする意図があったとしても、列強間の対立やそれに伴う勢力均衡の喪失が朝鮮を滅亡に追いやったというのである。それにもかかわらず、グリフィスは朝鮮が依然として独立する可能性があったと見ていた。したがって、グリフィスは、結局、朝鮮の両班支配層の問題という内部要因によって滅亡したと見たのである。

こういうわけでグリフィスは、朝鮮が日本の保護国となってから朝鮮を日本の福利のためではなく、一次的には朝鮮の福利のために開発することを望んだ<sup>115</sup>。そして、それを健全な判断力をもった世界の人々に満足のいくように説明することを望んだ。そうしさえすれば全世界の人類の良心が喜ぶ

だろうというのである。グリフィスがこのような立場を取るようになったのは、日本が韓国に借りがあるという理解と関連があるだろう<sup>116</sup>。それまで日本は朝鮮から受けてだけで与えたことはなかったというのである<sup>117</sup>。つまり、日本は韓国に対して歴史的に借りがあるというのである。よって、グリフィスは、今度は日本が韓国の近代化のために改革を支援しなければならないという考えをもつに至ったのである。

ところが、グリフィスの考えはあまりにも純真であった。朝鮮を保護国化した日本は、グリフィスの著述によく表れているように野心を具体的に露わにしたのである<sup>118</sup>。ポーツマス条約が締結されると、日本で最も低俗で無礼な冒険家たちがこぞって朝鮮にやってくる朝貢人から酷いやり方で略奪し、禽獣のような蛮行を行ったのである。日本政府はそれを長きにわたって傍観した。これは、朝鮮としては最初に経験した最も不幸な結果であった。結局、日本は、朝鮮が必要とする実質的な改革は行わなかったのである。実際にはそれとは反対の方向に向かった。日本人が朝鮮の未開拓地を占有し耕作するようにし、灌漑水路の権利も日本人に配分するべきとの改革案が日本で通過したためである。これについてグリフィスは、事実上の略奪行為であり日本の大きな失策だったと批判した。

グリフィスは第8版序文で、日本人は韓国を統治することにおいて、英国、米国、フランス、ドイツと同じように世界から道徳的な試練を受けていると指摘している<sup>119</sup>。あらためて道徳を強調し始めたのである。日本に対するグリフィスの期待は日帝による韓国強占以降も一定期間続いた<sup>120</sup>。朝鮮を滅亡に追い込んだ両班階級が消滅し、韓国が新たな変化を示しているというのである。一方、日本が犯した問題については、韓国のプロテスタント信者が日本の精神を刷新することによって克服できると見た<sup>121</sup>。

ところが、3・1運動を経てグリフィスの立場は大きく変化した。グリフィスにとって、日本の道徳的能力に対する関心が大きくなったからである。それは、グリフィスが1920年代に入り、米国で独立運動を展開していた韓国の政治勢力と緊密な関係をもつようになったことからうかがい知ることができる。韓国の独立運動家にとっても、米国の代表的な日本通による日帝植民統治への批判が必要だったので互いに利害が一致したのである<sup>122</sup>。このときグリフィスは韓国の独立と日本との共存を主張しているのである。したがって、グリフィスの韓国観は、基本的な志向では韓国の独立を支持していたとはいえ、時期別にかかなりの違いを示しているといえるだろう。

## 原注

- 1 申福龍(シン・ボンニョン)、「日本を知ろうとするなら、まず朝鮮を見よ」『異邦人が見た朝鮮を読み直す』(プルピッ、2002年)において、グリフィスを反植民主義史学者と規定している。
- 2 チョン・ソンファ、『西洋の韓国』(明知大学出版部、2005年)、p.133(第5章「ウィリアム・グリフィスの韓国観」)
- 3 李泰鎮(イ・テジン)、「近代韓国は果たして「隠遁国」だったのか?」『韓国文化』41・42輯(ソウル大学校韓国文化研究所、1999年)、p.747
- 4 チョン・ソンファ、前掲書を参照のこと。
- 5 金壽泰(キム・ステ)、「ウィリアム・グリフィスの韓国古代史著述」、2006年
- 6 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』(延世大学出版部、1995年)、p14
- 7 チョン・ソンファ、前掲書、p.140
- 8 鄭然泰(チョン・ヨンテ)、「19世紀後半から20世紀初めにかけての西洋人の韓国観」『歴史と現実』34号(歴史批評社、1999年)、p.201
- 9 チョン・ソンファ、前掲書、p.140、およびp.116(第4章「19世紀後半における米国教会者の対外認識」)
- 10 ユ・デヨン、『開化期朝鮮と米国宣教師』(韓国基督歴史研究所、2004年)、pp.442~443
- 11 グリフィスの著述目録としては、Leah H. Gass が2003年に作成したものがある(Korean Materials in the William Elliot Griffis

- Collection)。
- 12 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』（集文堂、1999年）、p. 16。ところで、‘隠者の国’よりも‘隠遁の国’のほうが適切ではないかと考える。よって、本稿では‘隠遁の国’と表記している。
  - 13 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 550
  - 14 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 563
  - 15 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、pp. 15～16
  - 16 グリフィス、李萬烈（イ・マンニョル）編、『アベンゼラー』、p. 15
  - 17 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 75
  - 18 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 74
  - 19 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 19
  - 20 グリフィス、『韓国：内部と外部』、1885年、p. 4
  - 21 チョン・ソンファ、前掲書、p. 140
  - 22 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 16
  - 23 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 18
  - 24 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 101
  - 25 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 47
  - 26 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、pp. 6～7
  - 27 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 15
  - 28 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 209
  - 29 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 203
  - 30 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 29
  - 31 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 7
  - 32 李泰鎮、前掲論文を参照のこと。
  - 33 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、pp. 537～538
  - 34 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 536
  - 35 グリフィス、『韓国：内部と外部』、1885年、p. 4
  - 36 1878年の『サンデイマガジン』に掲載された文章の主題である。
  - 37 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、pp. 16～17
  - 38 李泰鎮はこれを「韓国：日本の摂理」と翻訳した（前掲論文、p. 726）。日本による韓国強占は摂理だということである。
  - 39 ハルバートは『大韓帝国滅亡史』において古代、中世、近世の3つの時期に区分した。
  - 40 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 8
  - 41 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 239
  - 42 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 395
  - 43 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 423
  - 44 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 598
  - 45 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 26
  - 46 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 598
  - 47 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 580では、大衆教育と表現している。
  - 48 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 434
  - 49 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 580
  - 50 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 183、p. 221
  - 51 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 442
  - 52 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、pp. 445～446
  - 53 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 150
  - 54 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、pp. 175～178
  - 55 18世紀後半、経済との関連から近代の始まりを見る見解は一般的に否定されている（高東煥、「近代化論争」『韓国史市民講座』第20輯、一潮閣、1997年、p. 200）。最近、カトリックの受容と関連させて近代の始まりを見る見解が出されている（盧庸弼、「韓国史における‘近代’の設定と天主教」『韓国 近・現代社会とカトリック』、韓国史学、2008年）。
  - 56 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 146
  - 57 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、pp. 461～462
  - 58 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 484
  - 59 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 495
  - 60 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、pp. 511～512
  - 61 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 506
  - 62 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、pp. 508～509
  - 63 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、pp. 519～523、pp. 534～535
  - 64 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 40

- 65 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 484
- 66 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 40
- 67 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 540
- 68 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、pp. 73～74
- 69 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 47
- 70 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 47
- 71 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 563
- 72 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 572
- 73 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 591
- 74 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 3
- 75 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 592
- 76 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 225
- 77 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 225
- 78 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 94
- 79 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 145
- 80 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 171
- 81 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 170
- 82 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 618
- 83 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 256
- 84 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 146
- 85 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 592
- 86 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 145
- 87 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 8
- 88 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 597
- 89 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 592
- 90 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 570
- 91 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 637、グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 258
- 92 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 564
- 93 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 160
- 94 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、pp. 580～581
- 95 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 564
- 96 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 618
- 97 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 160
- 98 同上。
- 99 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 572
- 100 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 579
- 101 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 199
- 102 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 572
- 103 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 188
- 104 ユ・デヨン、『開化期朝鮮と米国宣教師』、2004年、pp. 446～447
- 105 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 619
- 106 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、pp. 571～573
- 107 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、pp. 65～66
- 108 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 626
- 109 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、pp. 13～14
- 110 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 626
- 111 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、pp. 571～572
- 112 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 304
- 113 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、pp. 626～627
- 114 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 542
- 115 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 637
- 116 グリフィスは1919年、こうした内容の文章を書いた。
- 117 グリフィス、李萬烈編、『アベンゼラー』、p. 14
- 118 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、pp. 629～631
- 119 グリフィス、申福龍訳、『隠者の国、韓国』、p. 14
- 120 『隠者の国、韓国』第9版（「朝鮮、日本の地方」、1911年）において、一部に問題はあっても全体的にはそうではないと見ていた。プロテスタントの状況も同様だという。それから、『アベンゼラー』、pp. 257～258において、1911年に起った変

- 化に大きな意味を見出している。近代式の帽子、履物、服、髪型を採用し、近代的な建物がそびえていると述べている。  
 121 『隠者の国、韓国』第9版「朝鮮、日本の地方」、1911年。  
 122 このテーマについては、今後、具体的に考察する予定である。

【参考文献】

- 그리피스, 이만열 편, 『아펜젤러』, 연세대학교 출판부, 1985.  
 그리피스, 신복룡 역, 『은자의 나라 한국』, 집문당, 1999.  
 고동환, 「근대화논쟁」 『한국사시민강좌』제20집, 일조각, 1997.  
 이태진, 「근대 한국은 과연 ‘은둔국’ 이었던가?」 『한국문화』 41・42집, 서울대학교 한국문화연구소, 1999.  
 정연태, 「19세기 후반 20세기초 서양인의 한국관」 『역사와 현실』 34호, 역사비평사, 1999.  
 신복룡, 「일본을 알려거든 조선을 먼저 보라」 『이방인이 본 조선 다시 읽기』, 풀빛, 2002.  
 류대영, 『개화기 조선과 미국 선교사』, 한국기독교역사연구소, 2004.  
 정성화, 『서양의 한국: 이미지의 탄생과 변화』, 명지대학교 출판부, 2005.  
 (제4장「19세기 후반 미국 목회자들의 대외인식」, 제5장「윌리엄 그리피스의 한국관」을 수록).  
 노용필, 「한국사에서의 ‘근대’ 설정과 천주교」 『한국 근·현대 사회와 가톨릭』, 한국사학, 2008.